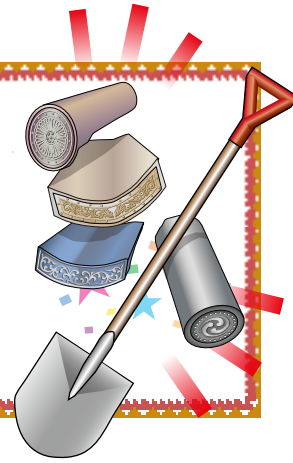


やましなほんがんになんでんあと 山科本願寺南殿跡の発掘調査（第10次）

調査期間：令和3年4月27日（火）～5月1日（土）

調査機関：京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

山科本願寺南殿跡は、京都市山科区音羽伊勢宿町を中心として広がる周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です（図1）。戦国時代に浄土真宗本願寺の宗主の隠居所として建てられた邸宅で、現在も地表に土塁や堀の起伏が残ることで知られています。

その一部は史跡（遺跡のうち歴史・学術上の価値が高いもの）として国の指定を受けていますが、京都市ではその周辺を重要遺跡として取扱い、小規模な開発であっても事前に発掘調査を行い、遺跡全体の様子を把握するよう努めています。

今回の調査は、昨年度に史跡範囲の南側において実施した第9次調査の追加調査になります。調査の結果、江戸時代とみられる遺構面の再確認に加えて、さらに古い時代遺構を検出しました。

2 戦国時代の山科本願寺南殿

山科本願寺南殿は、本願寺第8世宗主であった蓮如が、延徳元年（1489）に自身の隠居所として造営した邸宅です。これをさかのぼる文明十年（1478）に、山科本願寺が建立され、やがて土塁や堀に囲まれた広大な寺内町が形成されました。南殿の推定地である音羽伊勢宿町は山科本願寺の東にあたりますが、本願寺が山科北殿と呼ばれたことに対応して南殿と呼ばれるようになったとされています。

その構造は、『光照寺所蔵絵図』によると方形区画をもつ「内郭」とこれに接続する「第二郭」、さらにこれを取り巻く「外郭」から成り、それぞれの周囲に土塁と堀をめぐらせた壮大な景観を呈していました。

蓮如は、一時的に石山本願寺（大阪）へ移りますが、明応8年（1499）にふたたび山科へ戻り、この地で亡くなります。蓮如の精力的な布教により本願寺派は日本有数の大教団となりましたが、支配者層に抵抗する一向一揆を誘発したことから、幕府や戦国大名と衝突するようになりました。天文元年（1532）、細川晴元と通じた京都の法華宗徒と近江の六角定頼は、山科本願寺及び南殿を攻撃し、陥落、焼亡させました。

その後、内郭付近に「泉水山光称寺」と称する寺院が建立されました。現在この地に建つ浄土真宗大谷派光照寺は、この寺灯を継承したものと伝えられています。

3 今回の発掘調査成果

山科本願寺南殿跡ではこれまでに計9回の調査を実施しています。第1次調査では、内郭の東の土塁と堀、柵列跡等が見つかりました。その配置が、光照寺所蔵絵図とおおよそ合致することから、現在では失われた土塁や堀の位置も想定復元されています。

今回の調査地は第9次調査で東西方向の溝21が検出された地点にあたります。今回、この溝を掘削したところ、最大幅1.3m、最大深度0.7mを測る規模をもつことがわかりました。

一方、その下層では、北東－南西方向へのびる溝30を検出しました。断面U字形の掘り方をもつ人為的な遺構で、礫が充填されていたことから、排水のための暗渠や建物の基礎を固める地業跡の可能性あります。

どちらの遺構も遺物を含んでいないため成立・埋没時期は不明ですが、平成18年度に行われた西側の第2次調査では、江戸時代の遺構面において溝21に連続する溝が、戦国時代の遺構面において溝30に近似する掘方

をもつ溝が検出されています（第2次調査SD12）。これらの遺構と南殿との関係はまだ分かりませんが、

戦国時代にこの土地に開発が進められたことは、確実と言えます。（黒須亜希子）

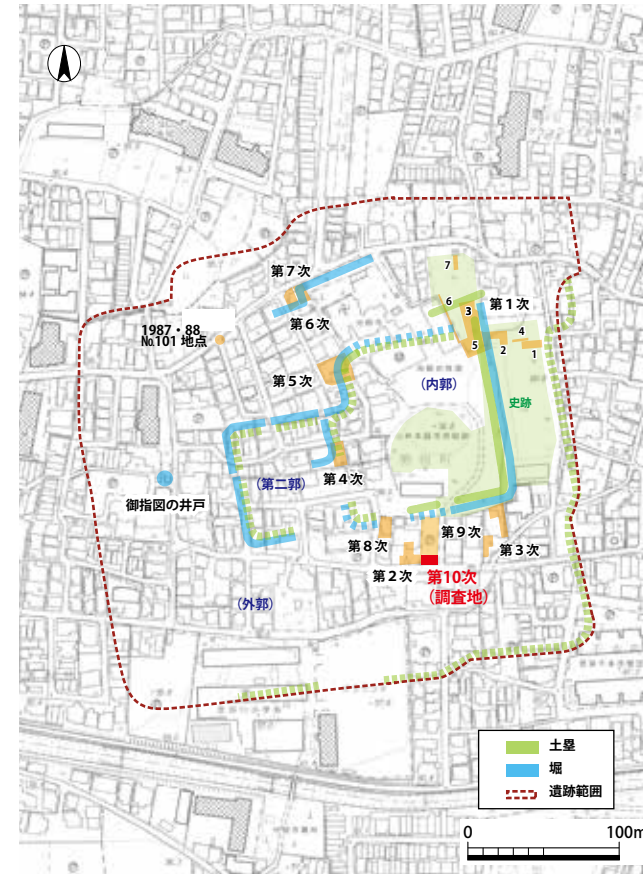


図1 遺跡の範囲と既往の調査位置（1：5,000）



図2 溝21完掘状況（東から）



図3 溝30完掘状況（南西から）

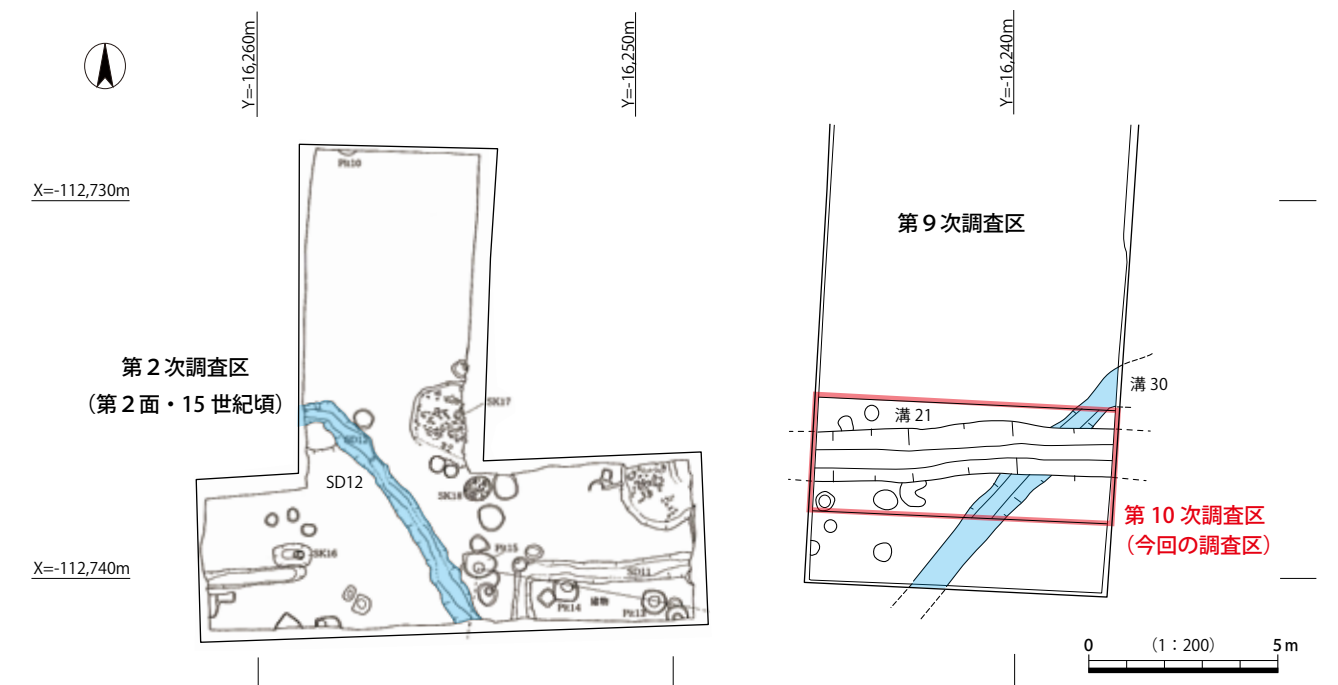


図4 遺構面接合図（戦国時代）